



「こころ寄せ合う看護の中に、春の温もりが伝わってくる」

photo 藤田佳久

孤独を感じさせない看護を

今、孤独死について社会問題になってきています。ご家族を亡くされひとり暮らしの方が増えています。「いつ死んでしまうかわからない。誰にも知られずに・・・」と話されるご遺族の方がいます。

ホスピスに入院するというと、「死」を連想されて覚悟を決めて入院される方が多くいます。本当は、住み慣れた家で過ごしたいけれど、帰ることが叶わない事情が多々あるようです。当院でも、ご家族のいない患者さまが増えており、遠い親せきや、近くの友人がキーパーソンになることもあります。そんな中での病院での死も、ある意味では「孤独な死」と言えるのではないのでしょうか？

私たちは、ホスピスマインドを持ち、家族となったつもりで「なんでも気になることは言ってくださいね」と伝えたいです。しかし、訴えることのできない方もいます。この方に、何が必要なのか？何をしてほしいのか？私たちの思いだけでケアしていいのだろうか？と悩みます。

ある脳転移の患者さまが、入院して

吉村 良子・文
函館おしま病院
ホスピス病棟看護師長



よしむらりょうこ
社会福祉法人函館厚生院函館
厚生院看護専門学校卒業。
平成16年函館おしま病院勤務。
平成22年12月より同病棟ホス
ピス病棟看護師長に就任し、現
在に至る。

から食事もとらず、閉眼をして過ごしていました。声をかけるとうなずくだけ。先生の回診の時もうなずくだけです。眠りましたか？に、うなずく。痛くないですか？に、うなずく。ご本人が苦痛でないのなら、そのまま様子を見る事になりました。しかし、夜勤の看護師は見えていました。夜は、ずっと閉眼して過ごしていることを。「眠れない」と言葉に出します。話せるのです。「今度散歩にお連れしますね。ウソついたら針千本のみますね」と看護師が言うと大笑いしたのです。どうにかしてあげたいとカンファレンスを開きます。「うなずきますが、いやな時はうなずきませんよね」という言葉に、医師も考えます。「(回診の時に)言葉がけを変えてみたら、OKサインをしてくれた」とのこと。そこからまたケアが変わります。

日々観察眼を磨き、患者さまの傍らにいる(精神的にも)看護師をめざしています。そして、病院にいて孤独を感じさせない看護を探っていく、できることなら住み慣れた家での生活に近づけていきたいと思えます。